文学の実在（ブィト）

1

私たちはすべてのファクトを同時に目にするわけでも、同じものを常に見るわけでも、同じ相関性を明かす必要が常にあるわけでもない。私たちが知っていること、あるいは知ることができることすべてが、私たちの理解において何らかの意味的記号で結びつけられるわけではなく、偶発的に既知のファクトへと形を変えるのである。文書や各種の回想録に残された過去の膨大なマテリアルは部分的に紙面で公開される（そして常に同じものとは限らない）だけだが、それは理論が何らかの意味的記号のもとでシステム化される権利と可能性を賦与するのがその一部だからである。理論の外には歴史システムも存在しないが、それはファクトを選択し解釈する原則が存在しないからである。

しかし、どの理論も作業仮説であり、ファクト自体への関心に導かれる。それは、必要なファクトを分別してシステムの中に集めるためだけに必要なのである。何かしらのファクトの必要性自体、何かしらの意味的記号の必要性自体は、現代性によって、差し迫った問題によって規定される。歴史とは本質的に複雑なアナロジーの科学であり、複視の科学である。過去のファクトは、私たちによって意味あるファクトとして区別されシステムに組み込まれるが、それは決まって必然的に現代的問題の記号のもとで行われる。こうしていくつかの問題は別のものに置き換えられ、いくつかのファクトは他のものによって遮られる。この意味において、歴史とは過去のファクトをもとに現在を研究する特別なメソッドである。

問題と意味的記号の交代は、伝統的なマテリアルの再編と新しいファクトの導入をもたらすが、それは自然な限界の結果として以前のシステムから脱落していたファクトである。新しい一連のファクトを（何かしらの相関性の記号のもとで）加えることはその発見のようなものであるが、システムの外にあること（「偶然性」）は科学的観点からすれば存在しないに等しいからである。

文学という科学（それは批評も部分的に同様、いずれも理論と結びついている）の眼前にはいま、次のような問題が浮上した。文学的な現代は解釈とシステム化を必要とする多くのファクトを表面化させたのである。言い換えれば、生活が表面化させたファクトが意味を持つような新しい問題設定と新しい理論的仮説の構築が求められているのである。

近年、文学者や批評家の注目は主に文学的「技術」の問題と、文学的進化の具体的特徴解明、つまりスタイルとジャンルの内的弁証法の解明に向けられている。これは私たちが経験した文学的高揚の自然な結果だったが、それは文学の革命（象徴主義と未来主義）という形を取った。この高揚は、過去15年間に登場した膨大な理論文献によっても補強されている。文学の「歴史」はこの言葉本来の意味で無視され、さらにその科学的価値自体が疑われていたことは重要かつ特徴的である。「そもそもいかに書くか」と「次に何を書くか」という問いが分析と一般化を必要とし、アクチ

DOI: 10.14672/rf.v1i1.2447

ュアリティのあるものだったことを踏まえると、それも納得のいく話である。文学という科学の技術的、理論的（最も進化的傾向を研究するという意味で）志向は文学が置かれた状況自体によって導かれた。つまり、経験した高揚を評価し、文学の新世代が直面する問題に光を当てる必要があったのだ。「いかに作られたか」、あるいは文学作品がいかに作られうるかの観察が最初の質問に答えなくてはならなかった。文学の進化に関する独自の具体的な「法則」の特定は二つ目の質問に。

どちらも、10年前に文学の道に入った世代にとっては必要な程度まで達成されており、現在では大部分が大学における学問の財産、授業科目になっている。歴史は（いつもそうであるように）これらの問題をエピゴーネンたちに託したが、彼らはすばらしい努力を費やし（そしてしばしばすばらしい紙の上で）、しかし熱狂することなく専門用語を発明し、自らの博学ぶりをひけらかしている。

私たちの文学が置かれた現状は、新たな問いを提起し、新たなファクトを表面化している。

文学の進化はつい最近までフォルムとスタイルのダイナミクスの中で極めて鮮明に表出していたが、まるで中断し、停止したかのようだ。文学の闘争はかつて有していた独自の特徴を失った。かつての純文学的な論争は消え、目立った雑誌団体もなく、先鋭に表現された文学の流派もなく、極めつけだが、指導的な批評もなく、粘り強い読者もいない。それぞれの作家はまるで自分自身のために執筆し、文学集団は、仮にそのようなものが存在すればの話だが、なにか「文学外」の兆候に従って形成されているが、それは文学の実在的（ブィト）、とでも呼ぶべきものだ。同時に、技術の問題は明らかに他の問題に道を譲っており、その中心には文学的職業自体、「文学の仕事」自体という問題がある。「いかに書くか」という問題は、別の問題に取って代わられたか、少なくとも複雑化したが、その問題とは「如何に作家になるか」というものである。言い換えれば、文学自体の問題が作家の問題で遮られてしまったのである。

いま危機に瀕しているのは文学そのものではなく、その社会的実在（ブィト）の仕方であると断言できる。作家の職業的立場が変わり、作家と読者の相関性が変わり、文学作品の慣れ親しんだ条件とフォルムが変化し、文学的実在（ブィト）自体の分野に決定的な転位が生じたが、それは文学とその進化自体がその外的成立条件に依存していることを示す一連のファクトを明らかにした。革命によって生じた社会の再編、及び新しい経済制度へのシフトにより、作家はその職業を支える（少なくとも過去においては）多くの要素（安定したハイレベルの読者層、さまざまな雑誌や出版所など）を奪った。それと同時に、作家はそれまで必要とされていた以上に職業人となることを強いられた。作家の立場は、注文に応じて働く職人、または被雇用者の立場に近づいたが、一方で文学の「注文」という概念自体が曖昧なままであったり、自らの文学的義務と権利に関する作家の考えと矛盾していたりした。特別なタイプの作家が現れたが、それは問題の本質、作家である自らの運命自体を考えず、注文には「やっつけ仕事」で答える、職人として活動するディレッタントである。状況は二つの文学世代が出会ったことで複雑化したが、そのうち年長の世代は自身の職業の意味と課題について、もう一方の若い世代とは異なる見方をしていた。60年代初頭にロシア文学とロシア作家を取り巻いた状況を彷彿とさせるものが起

こったが、それははるかに複雑で馴染みないフォルムだった。
当然ながら、こうした状況では文学の実在（ブィト）的な性質の問題こそが特別な鋭さと関連性を獲得し、作家のグループ分け自体がこうした特徴の路線に従ったのだった。進化のファクト（少なくともかつて理解されていたように）よりも「起源」のファクトが表面化し、これにより文学という科学は新たな理論的「問題に直面することになったが、それは文学の進化に関する事実と文学の実在（ブィト）に関するファクトの相関性という問題」である。この問題が以前の歴史的、文学的システムの構築に組み込まれなかったのは、ひとえに文学の置かれた現状そのものがこれらのファクトを提起しなかったからである。いまやその科学的解明が待たれているが、それというのも、さもなければ私たちの眼前で起こる文学の進化過程そのものを理解できないからである。
言い換えれば、歴史的・文学的ファクトとは何かという問いが再び私たちの前に浮上したのである。文学史は現代文学の問題解明に必要な科学的原則として再び正当化されなければならない。今日の批評が力を失い、使い古された過去の原則に部分的に回帰することは、歴史的・文学的意識の貧しさによっておおよそ説明される。

2

伝統的な歴史的・文学的システムは、歴史的・文学的ファクトとはいったい何であるかを特定しなかったのと同様、進化と起源という概念自体の間に根本的差異を認めず、これらを同義語として扱う形で構築された。ここから「借用」、「影響」に関するナイーヴな理論が誕生し、ナイーヴな個人的・心理的伝記も発端は同じである。
近年の研究者たちはこのシステムを克服する一方、伝統的な歴史的・文学的マテリアル（伝記を含む）を放棄し、文学の進化という普遍的な問題に焦点を絞った。いずれの歴史的・文学的ファクトも、主に一般的な理論原理の説明に使われた。歴史的・文学的テーマそのものは背景に退いた。仮に文学史家の古い作品が相互にいかなる繋がりがあるかもわからない異質なファクトを原則もなく混合したことで生まれていたとすれば、新しい作品では反対の現象が見られる。それは、文学の進化自体という問題に直接関係しないものを全て徹底して拒否することである。これは、論争どころか、必然的で、さらに言えば歴史的義務でもあった。象徴主義から未来主義への道を通過した新世代の科学的パトスとはそうあるべきだったのだ。文学だけでなく、文学という科学もそれに伴って進化する。科学のパトスは、生きた文学的ファクトと問題の相関性自体がいかに変化するかに応じて、自らの方向を変えるものだ。古いマテリアルを再編し、歴史的・文学的システムに新たなファクトを導入することをパトスの目的とすべき瞬間が到来したのである。文学史は単にテーマとしてではなく、科学的原理として新たに登場しつつある。
一部の者は文学の実在（ブィト）に関するマテリアルに目を向けることは、文学的ファクトや文学の進化の問題から逸脱することだと考えているようだが、そのようなことでは全くない。これが意味するのは、進化的・理論的システムに、それが近年構築された時のように、起源のファクト、少なくとも「進化と歴史」のファクトに関連した歴史的事実として解釈で

きるもの、または解釈されるべきものを含めること、ただそれだけである。文学の進化に関わる一般的法則を研究する上では、とくにそれを技術の問題に応用させる上では、多様な歴史的つながりと相関性の意義に関する問題は二の次、あるいは無関係でさえあった。いまや、まさにこの問題が中心的となったのである。

文学の実在（ブィト）的マテリアルは今日、これほど感じられるにも関わらず、使われないままになっているが、これこそが現代の文学的・社会学的基礎になるはずだったように思われる。というのも、こうした研究では今まで歴史的・文学的ファクト自体の問題が提起されなかったが、これにより古いマテリアルの再編も、新たな導入も行われなかったのである。私たちの文学的な「社会学者ら」は、文学の進化に関する特性（真の社会学的観点に矛盾しないだけでなく、それを支えるものである）を対象にこれまで行った観察を新たな意味的記号の下で使用する代わりに、文学の進化と文学のフォルム自体の「根本原因」をメタフィジカルに模索し始めた。彼らは二つの可能性に直面したが、それらはすでに十分活用され、歴史的・文学的システムを新たに生み出すものではない。作家の階級イデオロギー的観点からの作品分析（純粋に心理的な方法であり、この目的として芸術は最も不適切で最も特徴的でないマテリアル）、および時代の一般的な社会経済的、経営的フォルムから文学のフォルムとスタイルを因果関係的に導き出すこと（たとえば、レールモントフの詩と30年代の穀物輸出）は、必然的に文学という科学から独立性と具体性の両方を奪う道であり、「唯物論的」と呼べる代物ではない。エンゲルスが早くも1890年の手紙でこの道について警告し、そうした類の試みに憤慨したのも無理はない。「歴史の唯物論的理解は今や多くの友を見出したが、そうした人物にとってこれは歴史を勉強しないための口実となっている……史的唯物論のフレイジオロジー（ちなみに全てはフレーズで言い表せる）は、若い世代の多くのドイツ人にとって、自分たち自身の、比較的に極めて小規模な歴史的知識をできるだけ早く構築し、引き続き勇敢に前進するためだけに役立っている…...こうした者たち全員に欠けているのは即ち弁証法だ。彼らはいつも、原因はここ、結果はあそこ、のように考えている。彼らは、これが空虚な抽象概念であり、このようにメタフィジカルな両極矛盾は現実世界で危機の時にしか存在せず、偉大なプロセス全体は相互作用の形で起こることを理解していない」。

近年の文学的・社会学的試みが新しい成果を一切もたらさなかっただけでなく、一歩後退、つまり歴史的・文学的印象主義への回帰でさえあったことは驚くにあたらない。宗教的課題ではなく科学的課題ばかりが念頭にあるのであれば、いかに起源の研究が遠くまで遡ろうとも、根本原因に導くことはない。そもそも科学とは現象の特質と相関性を説明するのではなく、確立するだけである。歴史はひとつの「なぜ」にさえ答えられず、「それが何を意味するのか」という問いだけに答えるのだ。

文学はあらゆる特殊な他種の現象と同様、他種のファクトによって「生成」しえず、従ってそれらに「還元」しえない。文学的な一連のファクトとその外に存在するファクトとの関係は単なる因果関係ではありえず、相関関係、相互作用の関係、依存関係、または条件性の関係でしかあり得ない。これらの関係は、文学的ファクト自体（『レフ』1924年、№2に掲載されたYu.トゥイニャーノフの論文「文学のファクト」を参照）の変化に応じ

て変化し、進化に侵入しては自らでもって歴史的・文学的プロセス（依存性または条件性）をアクティブに形成することもあれば、よりパッシヴな性格を帯びることもあり、その場合に一連の起源は「文学外」のままで、それ自体は一般的な歴史的・文化的ファクター（相関または相互作用）の領域に退く。
このように、ある時代は雑誌と編集の実在（ブィト）自体が文学的ファクトの意味を持ち、別の時代には社会、サークル、サロンがそうした意味を獲得する。したがって、文学的・実在（ブィト）的マテリアルの選択自体と、その導入原則はつながりと相関性の性格によって決定されるべきで、その記号の元でその瞬間の文学的進化が起こるのである。

3

文学は別の種に還元できず、その単なる産物でもありえない以上、文学を構成するすべての要素は起源的に特定可能と考えてはならない。歴史的・文学的ファクトは複雑な構成で、その中で主要な役割を担うのは「文学性」自体であり、この要素は非常に特異であるため、その研究はそれ独自の進化という観点でのみ有益である。たとえば、プーシキンの弱強四歩格は、ニコライ一世の時代における一般的な社会的・経済的条件とも、その文学的実在（ブィト）の特殊性とさえも関連づけることが不可能（因果関係の観点だけでなく、条件性の観点からも）であるが、プーシキンが雑誌向けの散文に移行し、これによりその瞬間、彼の作品に生じた進化自体は30年代初頭における文芸活動の一般的な職業化と、文学的ファクトとしてのジャーナリズムが獲得した新たな意義によって条件づけられている。もちろん、この繋がりは因果関係ではなく、これはかつて欠如していた新たな文学的実在（ブィト）の条件を利用したものである。それはつまり、読者層が宮廷や貴族のサークルを超えて拡大し、書籍商と並んで特別な職業的出版屋が出現（スミルジンのような）、「アマチュア」的性質の「文集」から商業型の定期刊行物（センコフスキー著『読書文庫』）に移行したことなどである。この関係で、作家の職業という問題と「我らの新たな文学の商業的方向性」という問題（シェヴィリョフの有名な論文「文学と商業」、現代の用語で言えば「注文」と「やっつけ仕事」）をめぐる熾烈な論争もまた歴史的・文学的意義を獲得する。これらのファクトから、書籍商にとって予想外だった文集『北極星』（1823年）とプーシキンの詩『バフチサライの泉』（1824年）の商業的成功という、より初期の事態が思い起こされる。この詩をめぐっては、れっきとした「文学外」論争さえ巻き起こり、文学者（ブルガーリン、ヴャーゼムスキー）と書籍商の両方が参加した。1826 年の頃はまだ雑誌の報酬は珍しい例外だった。ブルガーリンはポゴジンが『モスクワ通報』で報酬を支払うつもりであることを知ると、彼に手紙を書き、「1枚につき100ルーブルずつ支払うというあなたの掲示は実現不可能です」と記した。プーシキンは1836年、バラントに手紙を書いた際、「文学が私たちにとって重要な産業になったのはわずか20年ほどのことです。それまで文学は優雅で、貴族のたしなみとしか考えられていませんでした……」と記し、文学と作家の立場に生じた変化を正確に特徴付けた。
「産業」へのこうした参入と同時に、30年代の作家は権力階級への伝統的

依存から抜け出し、職業人となった。50年代と60年代の雑誌は、文学の進化自体に影響を与えた作家たちの職業的組織という特定のフォルムである。彼らは文学生活の中心に立ち、作家自身がその編集者および発行者になった。文学的職業の問題に対する態度は原則的な意義を獲得し、一部の作家グループと他の作家グループとを区別した。現在では逆のプロセスが文学的意味で特徴的かつ重要になっている。それはトルストイやフェートの場合のように、文学的職業気質から「第二の職業」への脱出というものである。トルストイが籠っていたヤースナヤ・ポリャーナは、『同時代人』編集部と対立していたが、実在（ブィト）の鋭いコントラスト、地主作家による職業作家、「文学者」（たとえば、サルティコーフがなったような）への挑戦としての文学生活が盛り上がっていた。小説『戦争と平和』は、当時の雑誌小説だけでなく、「雑誌専制主義」に対する挑戦でもあったが、1874年にI.アクサーコフはこれについてN.レスコフに対し、「思うに、読者には雑誌を通じて作品の冒頭を知ってもらい、あとは個別に提示すれば十分です。レフ・トルストイ伯爵は自分の小説でそうしました」と嘆いていた。

文学的実在（ブィト）の概念、及びそれと進化のファクトの間に見られる相関性という問題に対する個別の説明は以上である。職業としての文学作品のフォルム、及び可能性は、時代の社会的条件に応じて変化する。職業となった執筆活動は作家の階級制を解消するものだが、そのかわりに作家を消費者、つまり「顧客」に依存させる。小規模な定期刊行物が発達（60年代がそうだったように）し、短編風刺作品が優勢になり、高尚なジャンルは衰退している。これを受け文学はその進化的な弁証法の法則に従い迂回する。ネクラーソフの隣にはフェートが現れたが、その「階級性」は雑誌韻文との文学的闘争の一手段だったし、サルティコフやドストエフスキーの隣にはトルストイが現れ、その「階級性」についてフェートは60年代初頭、「貴族文学そのものは熱意のあまり貴族の根本的利益に対峙するものとなったが、これについてレフ・トルストイの斬新で不屈の本能は実に憤慨していた」と証言していた。文学史にとって「階級」の概念とは経済学のようにそれ自体が重要なのではなく、作家の「イデオロギー」（往々にして全く文学的意味を持たない）を決定するためでもなく、自らの文学的、文学の実在（ブィト）的機能内部において重要なのであり、それは「階級制」自体が自身の機能内部で表出するときである。一貫して宮廷向けだった18世紀のロシア詩にとって、作家の「階級性」は特徴的でないが、それは「インテリゲンツィヤ」の環境で発展していた19世紀後半のロシア文学にとってそれが特徴的でないか、無関係であったのと同様である。社会的注文が文学的なものと必ずしも一致しないのと同様、階級闘争は文学的闘争、および文学グループとは必ずしも一致しない。分野外の場合、仮にそれが近接の科学であったとしても、その用語と概念は慎重かつ誠実に扱う必要がある。文学という科学は大変な努力によって、文化史、哲学史、心理学史などに奉仕することから解放されたが、それは法学と経済学の召し使いとなり、応用科学の惨めな生き方を耐え忍ぶためではなかった。

現代は文学の実在（ブィト）的マテリアルへと私たちを導いたが、それは私たちを文学から遠ざけ、近年成し遂げられたこと（文学という科学を想定）に終止符を打つためではなく、歴史的・文学的システムの構築に関す

る問題を再提起し、私たちの眼前で起こる進化のプロセスが何を意味するかを理解するためである。作家は現在、職業上の可能性を模索している。それが曖昧なのは文学の機能自体が複雑な結び目で絡み合っているからだ。問題は深刻である。作家を小規模な定期刊行物と「翻訳」に導く徹底した職業気質に並んで、「第二の職業」の成長によりそれから独立しようとする傾向が勢いを増しているが、それは収入を得るだけでなく、自らを独立した職人として感じるためでもある。私たち文学研究者や批評家にはこの結び目を解きほぐす手助けをする義務があり、グループ分けを人為的に考案し、「イデオロギー」の袋小路に追い込み、時評の要求を押しつけることでその結び目をさらにきつくしてはならない。そうした批評の道と手段は尽きており、文学について語るべき時なのだ。

（佐藤貴之　訳）